好きな女子の上履きの匂いを嗅いでみたら、思ったよりも臭くてもっと大好きになってしまった話



第１章　好きな子の上履き

９月の半ば。秋の気配を感じる柔らかな陽射しが差し込む教室で、**佐藤洋太（18）**は、前の席に座る、ある女子の背中を眺めていた。

森下結衣（18）。ミディアムの黒髪が、彼女がノートを取るたびにさらりと揺れる。

そのたびに、ふわっと甘い匂いが鼻先をかすめる。

シャンプーだろうか、柔軟剤だろうか。女の子らしい匂い。
洋太はその匂いを感じるたび、心臓が少しだけ早くなる。

（好き…なんだよな……）

そう自覚したのはいつだったか。

はっきりとは覚えていない。ただ、いつのまにか教室で自然と彼女を目で追っている自分に気づいた。

彼女は明るくて、誰にでも分け隔てなく接する。

クラスの男子、女子はもちろん、彼女が所属しているテニス部の部活仲間や先生とも。

いつも笑っている。その笑顔が、洋太には眩しかった。

洋太は、クラスで目立つ方ではない。

吹奏楽部に所属し、コントラバスを担当している。友達はそれなりにいるが、自分からグイグイ前に出るタイプでもない。

結衣と話すといえば、彼女から声をかけられたとき、おどおどしながら応じる程度。

それ以上、自分から距離を詰める勇気はなかった。

自分とは住む世界が違う。そう思っていた。

席替えがあったのは、つい先週の事だった。

くじを引き、あたった席は教室中央寄りの後ろから 2 番目の席だった。

隣は特に仲のいいわけでもない男子。
前に誰が座るのか、その時はまだ知らなかった。

（前の席、喋れるやつなら良いのにな……）

そわそわしながら待つ洋太。

その時、前の席から元気で明るい声が聞こえた。

「あ、佐藤君だ。よろしくね！」


よろしくね！

教室がざわつく中、前の席に座ったのが結衣だった。彼女は振り返って、にこりと笑った。

（……マジか）

心臓が跳ねた。嘘だろ、と思った。素直に嬉しかった。

でも顔には出さないようにした。ただでさえ話せないのに、意識しすぎて挙動不審になるのが怖かった。

「う、うん。よろしく…」

それだけ言うのが精一杯だった。結衣は気にした様子もなく、前を向いて教科書を出し始

めた。その背中を見ながら、洋太はしばらく落ち着かなかった。

結衣と席が前後になってから、洋太の日常は少し変わった。

授業中、前の席の結衣の背中が視界の半分を占める。
黒板を見るために少し背を伸ばすと、ミディアムの黒髪がふわりと揺れる。

紺のハイソックスに包まれた脚を、椅子の下で組んだり伸ばしたりする。その一つ一つの動きが、どうしても目に入ってしまう。

そして、彼女が動くたびにほのかに香る。甘い、優しい匂い。それが洋太の集中力を確実に削いでいた。

ある日の午後。退屈な古典の授業。

先生の声は眠気を誘うように単調で、教室の空気は弛緩していた。

洋太もまたノートに意味のない線を引いたり消したりしながら、ぼんやりと結衣の後ろ姿を眺めていた。

そのとき――

パカ…、パカ…、カタ……。

下の方から小さな音が聞こえた。最初は何の音か分からなかった。

でも、すぐに分かった。前の席の結衣が上履きを脱いだり履いたりしていたのだ。

椅子の下で、彼女の右足がかかとを浮かせて上履きを半分脱ぎ、つま先だけで押し込む。

そしてまた脱ぐ。左足も同じように。

パカ、パカ、という音は上履きの底が床に当たる音だった。

無造作な仕草だった。特に意味などないのだろう。ただの癖。退屈な授業の間の、小さな気晴らし。でも洋太の目は、何故か妙にその足の動きに吸い寄せられた。

白い上履きが、つま先にかろうじて引っかかっている。

かかとが完全に抜けて、靴の中が見えそうになる。結衣は気にしていない。前を向いたま

ま、先生の話を聞いているのか聞いていないのか、時折ノートに何か書いている。

洋太は、息を呑んだ。

ボーッと見つめていると、上履きが完全に脱げ落ちた瞬間があった。

右足が、上履きから抜ける。紺のハイソックスに包まれた足が、椅子の下で少しだけ浮いた。

そしてまた上履きに戻る。つま先から入れて、かかとを踏みつぶすように履く。

そのとき、チラッとだが、脱いだ上履きの中が見えた。

（……っ）

黒かった。

正確には、中敷きが黒ずんでいた。

全体的にうっすらと灰色がかった汚れが広がり、かかとの部分は、特に濃い黒ずみになっている。

一瞬見えたつま先の部分は、指が当たる部分がはっきりと指の形に黒く汚れていた――。

（え……）

洋太は、目を疑った。

いつも可愛らしく、清楚で女の子らしい結衣の上履き。
そんな彼女の上履きの中が真っ黒に汚れていたのだ。

もちろん今まで近くでマジマジと見たことなどなかった。
教室で履いている姿を見ているだけだったから。

でも、今、脱いだ上履きの中がはっきりと見えた。

長期間、毎日履き込まれて足の汗と皮脂が染み込んで、黒ずんでいる。

そういうものなのだろう。誰だって、毎日履いていれば上履きの中は汚れる。

分かっている。分かっているのに。

（すごい……）

洋太の心臓が、さっきとは違う意味で速くなった。手のひらに汗をかいている。喉が渇く。頭の奥で、何かがざわめいた。

清楚で、可愛らしくていつも笑顔の結衣。

クラスの人気者。男子からも女子からも好かれるクラスの中心人物。

密かに彼女に恋心を抱いている男子も少なくないはず。

洋太もその一人だった。

でも、今見たものは——そんな彼女の足が毎日、あの上履きの中で汗をかいて、蒸され、その結果として中敷きが真っ黒になるまで汚れているという事実だった。

（当たり前のことなのに……）

当たり前のことだ。人間なんだから。足は汗をかくし、靴は汚れる。でもその当たり前が、なぜか洋太の胸をざわつかせた。

（俺、今、変なこと考えてる…）

そう思った。でも目が離せなかった。

結衣がまた上履きを脱ぐ。パカ、パカ、という音。上履きが完全に脱げて、床に落ちた。

結衣は気にせず足を少しだけ浮かせて、また上履きに戻す。履き口を踏みつけてかかとで潰すように履く。

その一連の動作を洋太は食い入るように見ていた。

（俺、何見てるんだろう……）

自分でも分かっていた。これはただの好奇心とは違う。もっと別の、もっと深いところから来る感情。

好きな女子の上履きの中。そこに、妙に惹かれる自分がいる。

通学の電車で乗り合わせたOLのストッキングの脚を目で追ってしまうことがあった。

スカートから伸びる女子生徒の脚に、自然と目が行くこともある。

洋太には若干の脚フェチの自覚はあった。

しかしそれは単に「きれいだな」と思う程度のものだった。

脚そのものが、明確に性の対象だったわけではない。

でも、今感じている感情は明らかに普段のそれとは違った。

今、洋太が感じているのはもっと具体的で、もっと生々しいものだった。

好きな女子の上履きに、足の形が刻まれている。彼女の汗と皮脂と、体温があの汚れの中に染み込んでいる。

その事実とギャップに明らかに心がざわついていた。

（匂いとかもするのかな……）

そこまで考えて洋太は慌てて首を振った。

ダメだ。そんなこと、考えるべきじゃない。好きな女の子の靴の中の匂いを想像するなんて。最低だ。

でも、一度浮かんだ想像は消えなかった。むしろ、どんどん膨らんでいく。あの黒ずみの匂い。

見た目はあんなだけど、彼女らしい良い匂いがするんだろうか、それともももっと別の――。

授業が終わるチャイムが鳴った。

結衣は上履きをきちんと履き直し、教科書をしまい始める。振り返って洋太に笑いかけた。

「ごめん！佐藤君、古典のノートちょっと見せてもらってもいい…？さっきのとこ聞き漏らしちゃって……。」

いつも通りの明るい声。いつも通りの笑顔。洋太は慌ててノートを開いた。

「あ、うん。どうぞ…。」

ノートを渡しながら洋太は結衣の顔を見た。

可愛い。間違いなく可愛い。

でも、その可愛い結衣が履いている上履きの中はあんなに黒ずんでいた。その事実が、頭から離れなかった。

結衣はノートを受け取り、自分の席で写し始める。その背中を見ながら、洋太は思った。

（俺、どうかしてる……）

そう自覚した。でも、心のどこかであの上履

きの中をもう一度見てみたい、と思っている自分がいた。

あの黒ずみをもっと近くで。そして、できれば――。

（ダメだ。そんなの、絶対にダメだ…）

体の奥底で、何かが疼くような感覚があった。今まで感じたことのない、熱い、ざわめくような何か。

＊＊＊

放課後。教室を出る前に、洋太は何気なく結衣の席を見た。彼女はもういない。
帰宅中も、あの黒ずんだ中敷きがまだはっき

りと頭の中に焼きついていた。

その夜、自分の部屋で洋太はベッドに寝転がりながら、今日のことを思い出していた。

結衣の後ろ姿。パカ、パカ、という音。脱げた上履きの中の足の形に沿った黒い汚れ。

（俺、森下さんの上履きに興奮してるのか…？）

言葉にすると余計に意識してしまう。

でも、認めざるを得なかった。あの瞬間洋太は確かに興奮していた。

心臓が高鳴り、手に汗を握り頭がぼうっとするような感覚。それは、今まで結衣に向けて

いた「好き」という感情とは、明らかに違う種類のものだった。

情けない。最低だ。そう思う。でもその感情を否定しきれない自分もいた。

あの黒ずみ。あの中敷き。彼女の足が、毎日、そこに触れている。

（どんな匂いがするんだろう……）

また、その考えが浮かんだ。今度は、消えなかった。布団の中で洋太はごくりと唾を飲み込んだ。股間が勝手に硬さを増してくる。

（やばい……）

洋太は布団をかぶった。明日、学校で結衣に会ったらどんな顔をすればいいのか。

いつも通りに振る舞えるのか。自信がなかった。

でも、それ以上に――あの上履きをもう一度見たいと思っている自分がいた。

胸の奥が、ちり、と痛むように熱くなった。

それが恋なのか、それとも別の何かなのか。まだ分からない。分かりたくない。でも、確かに洋太の中で何かが変わり始めていた。

夏の終わりの少し涼しくなり始めた夜。

窓の外では少し切ないような虫の声が聞こえる。秋が、静かに近づいていた。

第２章　初めて嗅いだ上履きの匂い

あの日から、洋太の頭の中は結衣の上履きの事ばかりになった。

授業中も、家に帰ってからも風呂に入っているときも、布団の中でも。

あの中敷きの黒ずみがまぶたの裏に浮かぶ。

指の形に沿った汚れ。かかとの濃い黒ずみ。つま先の指の付け根のライン。目を閉じれば、ありありと蘇る。

最初は、視覚的な記憶だった。あの黒ずみ汚

れが頭から離れない。ギャップに心ざわついていた。

でも、2日、3日と経つうちに、どんどんと別の欲望が大きくなっていった。

（どんな匂いがするのか知りたい……）

匂いを知りたいという欲が湧き上がってくる度に、洋太の背筋がぞくりと震えた。

（やめろ。そんなこと考えるな……変態か、俺は……）

頭ではそう思う。でも、想像は止まらない。あの黒ずみは結衣の足の汗と皮脂が染み込ん

でできたもの。

毎日、彼女の足がそこに触れている。朝から夕方まで、ずっと。体育の日も雨の日も、暑い日も。

（……っ！）

理性とは裏腹に、想像するだけで、下半身が勝手に反応した。

ズボンの中でじんわりと熱が広がる。教室で、隣に誰かがいるのに。先生の話を聞きながら。そんな自分に気づいて、洋太は慌てて足を組み替えた。

自己嫌悪。最低だ。好きな女の子の、しかも靴の中の匂いを嗅ぎたいなんて。普通じゃな

い。気持ち悪い。

でも、想像は止まらない。

あの黒ずみの匂い。見た目は汚いけど、あの可愛い森下さんの靴だから良い匂いがするのかもしれない。

それとも…

想像は、確実に洋太の体に響くようになっていた。

夜、布団の中で結衣の上履きのことを考えると股間が痛いほど硬くなる。

何度も抗おうとした。何度も忘れようとし

た。でも無理だった。

＊＊＊

放課後。吹奏楽部の活動が終わったのは、17時を少し過ぎた頃だった。

洋太は教科書を忘れたことを思い出し教室に戻り、荷物をまとめた。

部活の仲間たちは、もうとっくに帰っている。

教室には誰もいない。窓の外は、もう日が落ちかけてオレンジ色の光が机と椅子の列を斜めに照らしている。

（帰ろう…）

洋太は廊下に出た。

誰もいない。昇降口へ向かう階段を降りる。

下駄箱の列が見えてきた。木製の、古い下駄箱。一足ごとに仕切りがあるだけの、シンプルなつくり。それぞれの空間に名前が書かれたプレートが貼ってある。

良くない事が頭をよぎる――

（森下さんの下駄箱は……）

自分の上履きを探すふりをして見まわすと、すぐに見つかった。

（あった……）

下駄箱のスペースの上部に書かれた「森下結衣」の文字。

名前を見ただけで股間が疼いた。

洋太は自分の下駄箱を通り過ぎ、結衣の下駄箱の前に立った。

心臓が、うるさいくらいに鳴っている。

手のひらに汗をかいている。周りを見回した。

誰もいない。昇降口には自分一人だけ。

外からは、部活の掛け声が遠くに聞こえる。
でもこの場所には誰も来ない。

（ちょっと見るだけだから……）

心臓をバクバクさせながら、スペース内に収められた上履きを見る。

中には女子らしい小さいサイズのうっすらと汚れた上履きがきちんと揃えて置かれている。

白ベースに、赤い学年ライン。教室で見るのと同じ上履き。

（……）

洋太は唾を飲み込んだ。

ゆっくりと手を伸ばす。指先が、上履きのかかとに触れる。

冷たい。内部に指が触れると少しだけ湿った感触。

彼女が今日一日履いていたものだ。朝からずっと。その事実が指先から伝わってくる。

（ちょっと触るだけ……いいよな。見るだけだし……）

言い訳をしながら洋太は上履きを手に取った。

右手で持つ。左足用の上履き。教室で見たあ

の上履きが、今は自らの手のひらに収まっている。

（中、見てみよう…）

洋太は上履きを傾けて、履き口から中を覗き込んだ。

（……やっぱり）

黒かった。

教室で見たときと同じ。いや、近くで見るとその汚れはより明確だった。

中敷きは、全体的に薄茶色にくすんでいる。

かかとの形に黒く凹み、足の形に沿って、つま先の部分には指の跡がくっきりと黒く残っている。

親指、人差し指、中指。5 本の指のラインが、まるで足型のように浮かび上がっている。

かかとの部分は、特に濃い黒ずみ。何層にも重なった汚れがかかとの形に沿って沈着している。

23cm と書かれた表記が黒ずみの下にかろうじて見える。

（これが……森下さんの上履き……！）

あの可愛い結衣の足にずっと履かれていた上履きの中敷き。

その足裏の形が、汚れとして残っている。毎日毎日、この中に足を入れて、歩いて走って、汗をかいて。その積み重ねがこの黒ずみなのだ。

（ヤバい……！）

股間はギンギンに硬くなり、もう自らの性癖を否定する余地はなかった。

（匂い……少しだけ……）

本能に抗えず、洋太の鼻が、自然と上履きに近づいた。

慎重に浅く。手に持った左足の履き口を自ら

の鼻先に近づける。

（……ッ！！）

（……くさい……！）

初めて嗅いだ、好意を持っている女子の上履きの中の匂い。

足汗が発酵したような匂いと上履きのゴムの匂いが混ざった香りが鼻を突いた――。

教室で彼女の近くにいるときに感じる、あの甘い匂いとは全然違う。もっと生々しい。も

っと直接本能を刺激してくる匂い。

（もっと……）

それだけではおさまらなかった。自然と、鼻先が更に汚れたつま先の方へと滑っていく。

履き口から、中へ。グイッと鼻をねじ込む。

狭い上履きの中。指の跡が黒く残っている、あの部分めがけて鼻をねじ込む。

鼻先を、可能な限り奥まで突っ込み呼吸をした。その瞬間だった――。

（あぁ……！）

モワッ、と濃厚な匂いが鼻腔を突き刺した。

ゴム臭と、蒸したそら豆を混ぜたような。濃厚な発酵臭。

汗とは違う。もっと、重い。もっと深い。体臭が熟成したような匂い。つま先に集中した足の匂いの核心部分。

（……ッ！）

洋太の脳髄が直接揺さぶられた。
頭の奥が、じんじんと痺れる。

普段教室で笑っている結衣の顔が浮かぶ。

あの可愛い顔。あの優しい声。あのきれいな指。その全部が、この匂いの持ち主なのだ。

（森下さんが……これを……）

股間が、痛いほど硬くなっている。

ズボンの中で主張するように。自己嫌悪と興奮が同時に押し寄せて、涙が出そうになる。でも離れられない。

もう一度、深く吸い込む。

（すごい……）

3度。4度。誰か来ないかという恐怖と、匂いを吸うたびに背筋を駆け上がる快感。いつまでも嗅いでいたいと思う本能と、バレたら終わるという恐怖感。

その狭間で洋太の心臓は壊れそうなくらいに高鳴っていた。

（そろそろ……戻さないと……）

理性で何とか抑え、上履きを元の位置に戻す。

震える手。異常なほど高鳴る鼓動。体が熱い。頭がぼうっとする。

（ヤバい…ヤバすぎる……！）

興奮、緊張、焦り、罪悪感。色々な感情が高純度で混ざり合う。今までの人生で味わったことのない感覚だった。

「もっと嗅ぎたい……いや、もうダメだ……帰ろう……」

洋太は溢れる欲望と勃起する股間を何とか抑えながら靴を履き替え昇降口を出た。

ガチガチに膨らんだ股間。誰かに見られないように、前かがみになりながら歩く。

校門を出る。夕暮れの道。家までの帰り道、ずっと心臓が鳴りっぱなしだった。

＊＊＊

その夜。自室で。

洋太はベッドの上で天井を見つめていた。カーテンの隙間から、街灯の光が細く差し込んでいる。

（最低だ……）

自己嫌悪が、波のように押し寄せる。好きな女の子の上履きを、隠れて嗅いだ。

しかもありえないぐらい興奮した。それだけでも最低なのに。

（それだけじゃない）

家に帰ってからも匂いが忘れられなかった。

あの、つま先の濃厚な発酵臭。ゴムとそら豆が混ざったような。鼻の奥に、まだ残っている気がする。

（あれが森下さんの……）

頭の中に、結衣の顔が浮かぶ。黒板を見ている横顔。ノートを取っている指。自分に話かけてくれる時の優しい声。その全部が、あの匂いと結びつく。

（俺、もう……）

気づいたときには、ズボンの中に手を入れていた。硬くなっている。痛いくらいに。あの匂いを思い出しながら。結衣の顔を思い出し。ゆっくりと、手を動かす。

（ダメだ……こんなの……）

だけど手は止まらない。むしろどんどん速くなる。あの匂い。あの黒ずみ。あの上履きの中。すべてが、頭の中で渦を巻く。

（森下さん……！）

行為は、長くは続かなかった。あっという間に限界が来た。

腰が浮く。体が震える。声を殺して、果て

た。

（……！）

行為の後、洋太は天井を見つめながらしばらく動けなかった。体は熱い。でも、心は冷えていく。

「最低だ俺……情けない……」

呟いた声は、自分でも聞こえないくらいに小さかった。

枕に顔を埋める。涙は出なかった。でも、胸の奥が苦しい。

（こんなの……もう、やめよう……）

そう決意した。明日からもうしない。絶対にしない。

普通に、普通のクラスメイトとして接するんだ。そう、心に誓った。

でも――

翌朝。目が覚めて、最初に思い出したのはあの匂いだった。

学校へ行き教室で結衣の後ろの席に座る。

その背中を見る。あの上履きを履いている結衣の足。その中が、今どうなっているのか考え

てしまう。

（……）

洋太は、また昨日と同じことを考えている自分に気づいた。決意は、もう揺らいでいた。

第３章　繰り返される秘密の行為

湧き上がる思春期男子の性欲には抗えず、あの日以来結衣の上履きを嗅ぐ行為は洋太の生活の一部になってしまっていた。

最初は一度きりの過ちのつもりだった。

もう二度としないと決めたはずだった。

でも、教室で結衣の笑顔を見るたび前の席で上履きを脱いで足で弄ぶ仕草を見せつけられるたび、決意は脆くも崩れた。

部活を早めに切り上げたり、部活のない日を選んだりして週に２度、３度とこっそり下駄箱へ通うようになった。

誰もいない昇降口を確認し、足音を殺して結衣の下駄箱の前に立つ。

震える手で上履きを取り出し、履き口に鼻を近づける。あの瞬間だけ洋太の世界は結衣の上履きの中だけになる。

２度目、３度目と嗅ぐうちに洋太はあることに気づいた。

匂いが、日によって違うのだ。

体育があった日は汗の酸味がいつもより強い。

全体に広がる酸味が、鼻腔を刺激する。

結衣が所属するテニス部の朝練があった日は、つま先の発酵臭が一段と濃い。

蒸したそら豆を通り越して納豆のような、ツンとくる匂いが奥の方から立ち上ってくる。

湿度の高い雨の日は、匂いが靴全体に充満している。じっとりと湿った空気が、匂いを閉じ込めているようだった。

（すごい……）

洋太はぞくぞくした。まるで結衣の一日の過ごし方が、匂いに記録されているみたいだ。

体育があったのか、朝練を頑張ったのかそれとも雨に濡れたのか。

上履きの中の匂いを嗅げば、彼女の一日の頑張りが分かるような気がした。

教室で普通に話すだけでは分からない、誰も知らない彼女の足の記録。

それを独り占めできる優越感にも似た感覚が、洋太をさらに深みへと誘った。

＊＊＊

授業中も、洋太の妄想は止まらなかった。

前の席の結衣の後ろ姿を見つめながら、洋太は想像する。

今あの靴の中はどうなっているだろう。

午前中の体育で走り回ったから、きっと汗をかいていつもより蒸れているんじゃないか。

黒板の文字を書き写すために少し背を伸ばすたび、紺のハイソックスに包まれたふくらはぎが動く。

その下の、布地に染み込んだ汗のことを思う。椅子の下で組まれた足。上履きの中でむれた足の指。

（今、どんな匂いがしてるんだろう……）

考えるだけで股間が熱くなる。

バレないように両手で抑えながら授業を受ける日が増えた。

ノートの上で右手が止まる。先生の声が遠くなる。頭の中は、結衣の上履きの中の匂いでいっぱいになる。

日に日に、洋太の興味は広がっていった。

上履きだけでなく、通学用の茶色いローファーはどうだろう。

部活で使うテニスシューズは。

そして、いつも履いているハイソックスは――。

結衣の足臭が染み込んでいそうなあらゆるものに、想像が及ぶようになった。

毎晩のように、洋太は結衣の靴や靴下の匂いを想像して自慰をした。

上履きの匂いを嗅いだ日の夜は、特に激しく。あのつま先の濃厚な発酵臭を思い出しながら、何度も果てた。

行為の後はいつも自己嫌悪が押し寄せる。でも、翌日にはまた考えている自分がいた。

（もう、戻れない……）

歪んでいるのは分かっている。でも、あの匂いを知ってしまった以上知らなかった頃には

戻れない。戻りたいとも思えなかった。

＊＊＊

ある日の放課後。洋太はいつものように下駄箱で結衣の上履きを嗅いでいた。

今日は体育があった。朝から 2 時間続きの体育で、今日はバレーボールの授業だった。

教室に戻ってきたとき、少し汗ばんだ顔をしていたのを覚えている。だからだろうか。

今日の上履きは、いつもより格段に濃い。履き口に鼻を近づけただけで、いつもとは違う濃厚な酸味が鼻を突いた。

（今日は、すごい……）

洋太は夢中で深く吸い込んでいた。

つま先の方からモワっと香る蒸したてのそら豆のような濃い発酵臭が立ち上る。

汗の酸味と混ざり合って、鼻腔の奥を直接刺激する。

いつもより長く何度も何度も嗅ぐ。

（もっと……もっと奥……）

鼻先をさらに深く、履き口から中へねじ込む。

指の跡が黒く残るつま先の部分に、出来るだ

け近づけるよう鼻をぐりぐりと押し当てる。

濃厚な匂いが脳髄を直撃する。目を閉じて、その感覚に浸っていた。

周囲への注意が、完全に薄れていた。
完全に匂いに夢中で油断していた――。

そのとき、背後から聞き覚えのある声が聞こえた。

「佐藤君、何してるの……？」

（……！？）

洋太の心臓が止まりそうになった。

全身の血が逆流する。おそるおそる振り返る。

そこに、森下結衣が立っていた。

信じられないものを見る目。驚きと困惑に満ちた表情。

手には通学用のローファー。忘れ物でも取りに来たのだろうか。それとも部活が早く終わったのか。全く気づかなかった。

「あ……ち、ちが……」

結衣の上履きを握ったまま、洋太は固まった。

言い訳が喉に詰まる。退学。その二文字が頭を埋め尽くす。

もうこの学校にはいられない。親に何と言うか。そんな思考が一瞬で駆け巡り、体が震え出す。足が勝手に震える。

結衣はすぐに怒鳴ったり悲鳴を上げて逃げたりはしなかった。

数秒、洋太の様子をじっと見つめていた。それから、静かに言った。

「……とりあえず、場所、変えて話聞かせて…？ここだと誰か来るかもだし……。」

その声は、怒っているというより、恐怖と困惑に満ちている感じだった。

（終わった……）

そう思った。何もかも終わった。そう覚悟しながら、洋太は結衣の後ろをついていった。

第４章　懺悔と懇願

空き教室。夕陽が斜めに差し込む中、二人は向かい合って座った。

結衣は窓際の椅子。洋太はその前に、まるで尋問されるように。

窓の外ではまだ部活をしている生徒たちの声が遠くに聞こえる。

「……で、佐藤君。私の上履きで何してたの……？」

結衣の声は、いつもの明るさとは少し違っていた。

静かで、少し怯えるような響き。洋太は震える手を膝の上で握りしめた。

顔を上げられない。結衣の目を見られない。

「……ごめん」

「……森下さんの、上履きの、匂いを…その……」

そこまで言って喉が詰まった。情けない。自分でも最低だと思った。

でも、嘘をついても仕方ない。もう見られてしまったのだから。

「前から、森下さんのことが好きで……」

気が動転していた。最悪のタイミングでの告白だった。

震えながら、正直に話した。

前から結衣のことが好きだったこと。
最初は興味本位で嗅ぎ始めたこと。

でも気づいたらやめられなくなっていたこ

と。震えながら、何度も頭を下げた。

「本当にごめん……もう絶対しない……。こんな事しておいて言える立場じゃないのは分かってる。でも、何でもするからお願いだからこの事は誰にも言わないでくれないかな……」

嗅いでいるのがバレたうえに結衣に口止めを懇願している。

自分でも最低だと思った。でもそれしか言えなかった。

退学になったら終わりだ。親に何と言えばいい。進路も何もかも、全部。

結衣は話を聞き終え少し困ったように笑っ

た。

「佐藤君って、そんな人だったんだ。ごめん、ちょっと気持ち悪いかも……」

その言葉に、洋太の心臓が縮む。グッと痛みが走る。

当然だ。気持ち悪いと言われて当然のことをした。

（もう終わりだ……）

俯く洋太の頭の上で結衣はしばらく黙っていた。

そして、少しからかうような試すような口調

で言った。

「私の上履き、くさかったでしょ……？　佐藤君はそういう匂いが好きってこと……？」

洋太は顔を上げられないままこくんと頷く。

声が出なかった。喉の奥が締まっている。

でも、否定はできなかった。あの匂いが好きだということを、今更隠しても仕方ない。全部見られてしまったのだから。

「……そっか」

結衣の声が、少しだけ柔らかくなった気がした。気のせいかもしれない。でも、洋太はそ

の変化を感じ取っていた。

結衣はしばらく黙って、それから小さく首を傾げた。

「佐藤君次第かな……ごめん、ちょっと考えさせて……。私、今日は帰るね」

そう言って、結衣は立ち上がった。

椅子の音がやけに大きく響く。窓の外の夕陽が、彼女の横顔をオレンジ色に染めている。その表情は、洋太には読めなかった。

「分かった……。本当ごめん……」

洋太はそれだけ言うのが精一杯だった。

結衣は振り返らずに教室を出て行った。

足音が廊下に消えていく。扉が閉まる音。そして、静寂。

（終わった……）

洋太はその場に座り込んだまま、しばらく動けなかった。

体の震えが止まらない。冷や汗が背中を伝う。頭の中では、結衣の「気持ち悪いかも」という言葉が繰り返し再生される。

（そうだよな……気持ち悪いよな……）

自分でもそう思う。好きな女の子の上履きを隠れて嗅ぐなんて。しかも、何度も何度も。そんな奴気持ち悪いに決まっている。

（でも……）

結衣はそんな自分を怒鳴りつけるわけでも、悲鳴を上げて拒絶したわけでもなかった。

「考えさせて」と言った。状況は最悪なのには変わりない。そんな中で藁をも掴むような思いでなんとか希望をひねり出そうとする。

（そんなわけない……あんなことして許してくれるわけが……）

淡い期待を打ち消すように洋太は頭を振った。窓の外では、部活の掛け声がまだ聞こえている。夕陽が少しずつ傾いていく。教室の中は、静かだった。

頭の中が、ぐるぐると回っている。結衣の驚いた顔。困惑した表情。そして「気持ち悪い」という言葉。それが、何度も何度も繰り返される。

やがて、暗くなり始めた教室を出た。

誰もいない廊下。昇降口。自分の下駄箱から上履きを取り出して履く。

そのとき、結衣の下駄箱が視界に入った。しかし、とてもじゃないが、もうそんなことをする気にはなれなかった。

（もう二度と……）

もう二度と、あの上履きを嗅ぐことはない。

そう思うと胸の奥がちくりと痛んだ。恐怖や後悔だけではない。何か別の感情が、そこにはあった。

家に帰る道のりは、長く感じた。いつもと同じ道。いつもと同じ風景。それなのに、世界の色が少しだけ違って見える。空はもう暗い。街灯がぼんやりと道を照らしている。

（明日、学校でどうしよう……）

結衣に会ったら何と言えばいいのだろう。ど

んな顔をすればいいのだろう。謝るべきか。それとも、何もなかったかのように振る舞うべきか。分からない。分からないことだらけだった。

その夜、洋太はほとんど眠れなかった。布団の中で何度も結衣の言葉を思い出していた。

「気持ち悪いかも」。「考えさせて」。その二つの言葉が、交互に浮かんでは消える。

天井を見つめながら、洋太はただ夜が明けるのを待っていた。

第 5 章　関係維持の条件と結衣のお願い

翌朝、洋太は生きた心地がしないまま登校した。

校門を通るとき足が少し重かった。昇降口で上履きに履き替えるときも、結衣の下駄箱を無意識に避けるように目を逸らした。

教室に入る。結衣はもう来ていた。いつものように友達と話している。その笑顔を見た瞬間、洋太の胸がぎゅっと締まった。

（いつも通りだ……）

でも自分は違う。洋太は俯きながら自分の席へ向かう。

前を通るとき、結衣と目が合うかもしれないと思った。怖かった。でも、結衣は友達との話に夢中で洋太には気づかなかった。

席に座る。背中越しに結衣の声が聞こえる。いつもと変わらない明るい声。そのことに、少しだけ安堵した。でもその安堵はすぐに緊張に変わった。

（今日、何か言われるんだろうか……）

1時間目の古典。先生の声が子守唄のように響く。

洋太はノートを開いたが、一文字も頭に入らない。前の席の結衣の背中を、どうしても見てしまう。

結衣はいつも通りノートを取っている。その姿が、余計に洋太を不安にさせた。

（俺、どうなるんだろう……）

昨日のことを思い出す。上履きを握ったまま固まった自分。

結衣の驚いた顔。空き教室での問い詰め。そして、最後の「考えさせて」。その言葉が、頭から離れない。

2時間目。3時間目。授業は淡々と進む。結衣は一度も振り返らなかった。

洋太に何か言うでもなく、いつも通りに過ごしている。それが逆に怖かった。

（もしかして、もうこのまま無視されるのかな……）

昼休み。洋太は教室を出て一人で購買へ向かった。食欲はなかった。でも、教室にいるのが苦しかった。廊下を歩きながら、結衣の姿を探している自分に気づく。

午後の授業。5時間目が終わり、6時間目が始まる前。

席に戻った洋太の机の上に、小さな紙切れが置かれていた。

（……？）

折りたたまれた紙。誰が置いたのか、周りを見ても誰も自分を見ていない。洋太は紙を開いた。丸い字で、短く書かれていた。

『今日の 17 時　部活終わった後、3 年 6 組で待ってるね』

結衣の字だった。名前は書かれていない。でも、あの丸い字は前にノートを見せてもらったときに見たことがある。結衣の字だ。

（……）

心臓が跳ねた。恐怖とほんの少しの期待。

その二つが同時に押し寄せる。3 年 6 組。今は物置や臨時の部室として使われている空き教室。

（何を言われるんだろう……）

6 時間目の授業は、全く集中できなかった。頭の中は放課後のことばかり。謝ること。もう二度としないこと。許してもらうこと。それ ばかり考えていた。

＊＊＊

放課後。部活には行かず洋太は図書室で時間を潰した。

時計を見る。16 時 40 分。まだ 20 分ある。落ち着かない。廊下に出て、指定の教室へ向かう。

誰もいない廊下。夕陽が窓から差し込み、床をオレンジ色に染めている。足音がやけに響く。

3年6組の前に着いた。ドアは閉まっている。中から物音はしない。洋太は深呼吸をした。手が震える。引き戸に手を当てゆっくりとドアを開けた。

教室の中。窓際の椅子に結衣が一人で座っていた。

夕陽が彼女の横顔を柔らかく照らしている。

その姿は、昨日と同じだった。でも表情は昨日とは違う。少しだけ、柔らかい。洋太が入ってくると結衣は顔を上げて、小さく微笑んだ。

「あ……佐藤君、来てくれてよかった」

いつもの優しい口調。そのことに、洋太は逆に緊張した。

「……ごめん、昨日は」

洋太は立ち止まったまま、俯いて言った。何から話せばいいのか分からない。でも、結衣は首を横に振った。

「ううん、大丈夫。とりあえず座って？」

洋太は言われるまま結衣の正面の椅子に座った。

距離は、2メートルほど。夕陽が二人の間に長い影を落としている。

結衣は少しの間洋太を見ていた。それから、静かに口を開いた。

「まず、誰にも言ってないから安心して？」

その言葉に、洋太は思わず「え……」と声を漏らした。

顔を上げる。結衣の目が、まっすぐに自分を見ている。

（本当に……？）

信じられなかった。あれだけのことをしたのに、誰にも言わないでいてくれた。その事実がじんわりと胸に染みていく。

「その代わり、昨日佐藤君が言ってた通り、本当になんでもしてくれるんだよね……？」

「え……うん！　もちろん！」

安堵が、そのまま返事になった。声が裏返った。でも、それでいい。なんでもする。何でもするから、許してほしい。

結衣は頬を軽く緩めた。それから、少しだけ目線を落として言い淀むように続けた。

「実はね、あの後先生に言っちゃおうかとか色々考えたんだけど。言ったら佐藤君、この学校にいられなくなっちゃうだろうし。もと

もと私への好意からの行動だったみたいだし、さすがに可哀そうかなって思って」

「だから、本当に私の言うこと何でも聞いてくれるなら、このまま黙っといてあげようかなって」

「うん……！　本当にできることならなんでもするよ！」

洋太は前のめりになって答えた。必死だった。結衣はそれを見て、フフッと小さく笑った。

「佐藤君必死じゃん(笑)。まぁ、そりゃそうだよね」

結衣はそこで一度言葉を切り、少しだけ目線を落とした。それから恥ずかしそうに、言い淀みながら続ける。

「それで、肝心のお願いなんだけどね……」

(……)

洋太は唾を飲んだ。何を言われるのか、想像もつかない。でもどんなことでもする覚悟はある。退学になりたくない。それだけだった。

「佐藤君は、私の上履きの匂い嗅いで、その……興奮してたんだよね……？」

「え……うん……ごめん……」

「うんん、いいの。実はお願いっていうのはその……言いにくいんだけど……」

結衣はそこでまた言葉を切った。

頬が少し赤い。夕陽のせいだけではない。洋太は息を止めて、結衣の次の言葉を待った。

教室の中はしんと静まり返っている。遠くで部活の掛け声が聞こえるだけ。

「……佐藤君が私の上履きの匂い嗅ぎながら、その……気持ちよくなってるとこ、見せてほしいなって……」

（……え？）

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。

（気持ちよくなってるとこ……見せてほしい……？）

頭の中で、結衣の言葉がゆっくりと再生される。

でも意味が飲み込めない。いや、飲み込もうとすると別の意味にしかならなくて。

「え……？」

洋太は間抜けな声を出した。結衣は顔を赤くして、早口で続けた。

「あのね、私の家って結構厳しくて。もう 18 歳なのに恋愛も禁止だし、彼氏とかもいたことなくて……。」

「私学校では勉強も部活も頑張ってる真面目なタイプって思われてると思うんだけど、本当はそういう事も結構興味あるというか、純粋な好奇心というか……」

「それに……この前はびっくりして気持ち悪いって言っちゃったけど、本当は、佐藤君が私

に好意持ってくれてるって知って、ちょっと嬉しかった……。」

「なんでもしてくれるって言ったよね……？」

顔を赤くして打ち明ける結衣。予想外すぎる展開に頭が追いつかない。

でも、その表情や声色から本気で言っているのだと洋太は理解した。それに断れる立場でもない。

（気持ちよくなってるところって……）

理解した瞬間、頭の奥がぐらりと揺れた。

恥ずかしさと恐怖と、それから――ほんの少しの興奮。

「分かった……それで許してもらえるなら……」

「本当……？　ありがとう！　じゃあ……早速いい…かな……？」

ぱぁっと表情が明るくなる結衣。その変わりように、洋太は少しだけ面食らった。

「え……今ここで！？」

焦る洋太。辺りを見回す。誰もいない。

でも、いつ誰が来るか分からない。この教室だって、空き教室とはいえいつ誰かが入ってきてもおかしくない。

「うん、ダメ……？」

「いや、誰かに見られたらまずいし……」

「大丈夫だよ。この時間なら誰も来ないし」

結衣はそう言って窓の外を見た。夕陽はもう

半分沈みかけている。確かに、この時間なら部活も終わりかけで校舎に残っている生徒は少ない。

（でも……）

正直戸惑った。こんなこと教室でやるなんて。

でも、結衣の勢いと断ってここで結衣の機嫌を損ねる事の方がマズいと思い、了承する。

「分かった……」

「本当……？　じゃあ今、上履き脱ぐね…？」

そう言って、結衣は空いている机に腰掛け上履きを脱ぎはじめる。

右足を浮かせ、かかとを軽く引っ掛けてするりと抜く。

白い上履きが、足首から離れる。その一連の動作を洋太は息を止めて見つめていた。

（今から……森下さんの上履きを…目の前で……）

結衣は左足も同じように脱いだ。上履きを両方手に持って、自分の膝の上に置く。それから洋太を見て、少しだけからかうように言った。

「今日体育で結構走ったし、部活の後だから、その…上履きにも結構におい移っちゃってると思うけど……。佐藤君、そういう方が好きなんだよね……？」

「……え……うん…まぁ……」

唾を飲み込む。

教室に入るまでの言いようのない不安は、もう消えていた。

かわりにこの状況を誰かに見られないかという緊張感はあるが、ひとまず最悪の展開は回避したという安堵と、目の前の状況に自然と下半身が硬くなり始めていた。

結衣は自分の脱いだ右足の上履きを手に持ち、履き口を洋太の方へ向けて差し出す。

「はい…じゃあ、佐藤君の好きなようにして……？」

「…う、うん……ありがとう……」

洋太はズボンをパンパンに膨らませながらそれを受け取る。

手のひらに伝わる脱ぎたての熱。履き込まれた使用感。中敷きの黒ずみ。そして何より、結衣本人の目の前で嗅ぐという背徳感。

洋太のズボン越しに膨らんだ股間を、結衣が興味津々で見つめている。

（見られてる……）

その視線が、さらに洋太を興奮させた。

羞恥とそれ以上の何か。ゆっくりと、脱ぎたての結衣の足汗と皮脂で真っ黒になった右足の上履きの履き口に、吸い寄せられるように息を止め、鼻を近づける。

（……温いっ……！）

履き口の縁に鼻先を軽く当てる。

まず感じる脱ぎたての熱。今の今まで結衣の足で履かれていたせいか、今までのどの日よりも強い熱気。

これは絶対にヤバい。この時点で股間がズボンを突き破る勢いで勃起する。

そのまま鼻を履き口に当てがい、ゆっくりと鼻から息を吸い込む。

（――ツンッ！……）

脱ぎたての熱。今までにない強い足臭。

それから、奥のつま先付近から香る濃厚なゴムとそら豆が混じったような濃厚な足の匂い。

鼻腔をまっすぐに刺激する。今まで嗅いだどの日よりも濃くて強い。

体育で走ったからだろうか。
部活直後の足で履かれていたからだろうか。
それとも、脱ぎたての熱のせいだろうか――。

（すごい……！！！）

下半身は、結衣の前で尋常じゃないほど勃起していた。ズボンが痛いくらいに圧迫される。

その様子を、結衣は顔を赤くして手で口元を抑えながらしっかりと凝視している。

（私の上履きの匂い嗅いで、すごいおっきくなってる……）

「私の上履きの匂い……どうかな……？　くさい、よね……？」

控えめに問いかける声。

その声がまた可愛くてたまらなかった。

息を荒げながら答える。

「うん……けっこう……」

正直だった。くさい。でも、そのくささがたまらない。

結衣は少しだけ口元を緩めた。

「そっか……佐藤君のズボン、凄いことになってるもんね……くさくて興奮するの……？」

「うん……ごめん……」

「うんん、いいよ……。その、佐藤君のおっきくなってるところ触ってみても良い……？」

「え……！？」

思わず聞き返す洋太。

しかし、戸惑う洋太の返事を待たずに結衣はすでに洋太のすぐ横にしゃがみ込んでいた――。

【この後の展開】

●結衣の脱ぎたて上履きの匂いを嗅ぎながら抑えきれず本人の前で勃起させてしまった洋太。

あろうことかその部分を触りたいと言い出す結衣。たじろぎながらも断ることも出来ずされるがままの洋太。

大好きな女の子の上履きを嗅ぎながらぎこちない手つきでアソコを弄られ我慢できるはずもなく…。

●最悪な展開を回避しただけでなく、結衣からのお願いで洋太からすると願ってもない秘密の関係となった二人。

結衣に自らの性癖を受け入れられた事をきっかけに今まで抑えていた欲が一気に放出。

上履きの匂いを思い出しての自慰だけでは我慢できず、通学用のローファーや学校で履いているハイソックスの匂いも嗅がせてもらえないか頼み込んでしまう洋太。

さすがに拒否されるかと思いきや、からかわれながらもOKをもらい、放課後、部活終わりの匂いをたっぷり嗅がせてもらえる約束を取り付ける。

●約束の放課後、待ち合わせ場所のネットカフェの個室に入り、学校＆部活終わりの結衣の１日の頑張りがたっぷり染み込んだ１年半以上履き込んだ通学用ローファーと使用感たっぷりのハイソックス越しの足裏を見せつけられもう我慢の限界。

結衣からの優しい言葉責め＆匂いのフルコースに体が動かなくなるまで連続射精させられる洋太。

さらに完全にスイッチの入った結衣に休むことすら許されずパンツを脱がされ……etc

一気に縮まった２人の秘密の関係。一線を越えた事をきっかけにさらに急速に加速する後半は濃厚フェチ描写満載の製品版でどうぞ！！